

授業づくりをこうマネジメントする(第8回)

2 「厳しさは愛」が意味すること

中嶋 吉田先生が着ておられる T シャツの背中には「厳しさは愛」という文字がプリントされていますが…。

吉田 これは、初めて創作ダンスに取り組んだときの生徒たちが「吉田先生は厳しい

けど愛がある」と言ってくれたことがきっかけになり、その後、私が信条とし

ているものです。

中嶋 なるほど。授業を拝見していると、子どもたちの実態を見て「旬」のタイミングで、絶妙な言葉かけをしておられることがよくわかります。叱咤激励だけではない。後には必ずフォローする言葉やねぎらいの言葉があり、最後は願いを語っている。子どもたちは、吉田先生の授業を通して「生き方」を学んでいるように思いました。



特に、なるほどと感心したのがチームに責任を与えておられることでした。

チーム・リーダーの責任感が彼女たちの反省の言葉や吉田先生からの問いかけの中に表れていました。リーダーは、できない生徒を責めるのではなく、親身にな

って励まし、その子ができたときは自分のことのように喜んでいました。

吉田 今では、全校集会でも教師の注意や指導の声もほとんどなく、リーダー中心に整列、点呼、進行為が当たり前のようになっていますが、異動してきたときは大きな挫折感を感じたんですよ（笑）。学年によっては、体育で20人以上の不参加者がいました。体操服を持ってこない生徒、持ってきても着替えない生徒も大勢いたんですよ。まさに天国から地獄へつき落とされたように感じました。今までの指導がまったく通用しないんです。忘れ物や遅刻をしてくる生徒が半数以上。以前の先生との比較や自分たちのほうが友中のことをよく知っていると言わんばかりに反発してくる子どもたちにどう立ち向かうか、いやどう寄り添うか、またこの先どうなるのだろうと不安になりました。何とか持ちこたえられたのは、先生が皆元気で前向きだったこと、学年を



越えて共通理解に努め、どの子も友中生という気持ちで接することができたから

です。そして、女子の創作ダンスに取り組んでから彼女たちとの関係が少しずつ好転していきました。

(本誌 p.132へ)